

Kommunisten は Partei を超えている  
 —— 『共産党宣言』と政党の廃絶 ——

石 塚 正 英

1. 問題の所在

かなり以前、おそらく1970年代初期に、ハロルド=ラスキの小著『共産党宣言小史』を読んだとき、ラスキは『宣言』について、レーニンとは相当違った解釈をしていることを知った。その頃わたしは、『なにをなすべきか』とか『国家と革命』とかのレーニン著作群を読み継いできたこともあって、ラスキの小著とその見解は脇にやってしまった。だが、1989年にマルクスとバクーニンとの19世紀的対立を克服する今日の契機について吟味する機会が与えられたとき、わたしは政党、いや共産党に対するレーニンの理解に強い疑念を抱き、共産党の廃

目 次

1. 問題の所在 .....	1
2. 『宣言』に記された Kommunisten の意味 .....	2
3. 『宣言』に記された Partei の意味 .....	3
4. 1848年革命後における Partei 問題 .....	8
5. 第1 インタナショナルと Partei .....	10
6. パリ・コンミュンと『宣言』第2版刊行 .....	12
7. 共産党が指導するプロレタリアート革命 .....	16
8. 今後生きる『共産党宣言』 .....	19

絶という観点からレーニン批判を綴った。それらは『文化による抵抗』と題する、昨年3月に刊行した拙著にまとめられている。そして昨秋、経済学史学会関東部会の幹事から、『共産党宣言』に関連した報告を行なうよう依頼された際、ソ連・東欧社会主義体制崩壊後のこんにち、はたして『宣言』に何がしの見直すべき余地があるものかと、よくよく考えてみた。そうしたなら、ソ連・東欧の共産党ないし一党独裁支配が倒れることによって、謂わば仮面の剥がれた『共産党宣言』が、わたしには見えてきたのである。

かつてハロルド・ラスキは次のように述べていた。

「マルクスとエンゲルスとは、共産主義者は一つの別個の党 (a separate party) を結成しないこと、かれらはしだいに社会主義社会へむかって進むあらゆる勢力と提携することを強く主張していた。一つの別個の共産党という考えはロシア革命のときに始まっている。それは、マルクスの思想にもエンゲルスの思想にもはいり込む余地はなかった」<sup>(1)</sup>。

ラスキのこの見解ははたしてより真実に近いのではあるまいか、そう考えたわたしは、この際『共産党宣言』のドイツ語文にあたって、本文中に「共産党」なる語句が何回くらい、そしてまたそれがどのような文脈上に記されているかを調べることにした。そして、驚いてしまった。本文中に「共産党 (die kommunistische Partei)」の語は1箇所しか記されていない。それも、他の章からみると不自然なほど分量の少ない、とってつけたような第4章(終章)に出てくるだけである。その語のあとに、これをうける代名詞のsieがあるので、それをも含めれば計2回しか、『宣言』中に共産党という語は登場しないのである<sup>(2)</sup>。これはいったい、どうしたことか。そのことに関連する問題、すなわち、マルクスにおいてKommunistenは当初からParteiを超えている、という問題を検討してみることとする。

## 2. 『宣言』に記されたKommunistenの意味

『宣言』の中で、「共産主義者」という語はどのように定義されているか。第2章「プロレタリアと共産主義者」では、次のように述べられている。

「共産主義者はプロレタリア一般に対してどんな関係に立っているか？

共産主義者は、他の労働者党に比べて、特殊な党ではない (keine besondere Partei) <A>。

かれらは全プロレタリアートの利益から離れた利益をもっていない。

かれらは、プロレタリア運動をその型にはめ込もうとするような特別な原則を掲げるものではない。

共産主義者は、他のプロレタリア党から、次のことによって区別されるにすぎない。すなわち、一方では、共産主義者は、プロレタリアの種々な国民的闘争において、国籍とは無関係な、共通の、全プロレタリアートの利益を強調し、それを貫徹する〈B〉。他方では、共産主義者は、プロレタリアートとブルジョワジーのあいだの闘争が経過する種々の発展段階において、常に運動全体の利益を代表する。

したがって共産主義者は、実践的には、すべての国々に労働者党のもっとも断乎とした、常に推進的な部分であり〈C〉、理論的には、プロレタリアートの他の集団にまさって、プロレタリア運動の条件、進行、および一般の結果への洞察力をもっている」<sup>(3)</sup>。

いまここで問題にしなければならない文章は、わたしが圈点を付けたA・B・Cの3箇所である。まず〈A〉の文章であるが、ここでマルクス・エンゲルスが強調したい点は何であろうか。一見すると二つ成り立つ。一つは、共産主義者は他の労働者党に優越するのではなく、それと並ぶ、一つの党を結成する、という解釈である。そしていま一つは、共産主義者は、他の労働者党にならって個別の集団としての党をつくることはしない、とする解釈である。前者の見解は共産党の存在を主張したことになるし、後者の見解は、労働者党とは別の、共産主義者だけから成る党すなわち共産党を否定していることになる。わたしは後者の見解に立つ。

次に〈B〉の文章であるが、これは他の解釈を入れる余地なく、明白に一つのことを語っている。すなわち、共産主義者はいかなる種類の区別立てであれそのすべてを否定した、プロレタリアート全体の利益を強調している。あれこれ個別の国やあれこれ個別の党（その支持者）の利益を擁護しているのではない。むしろ、自らも党をつくってその党利を主張することはありえない。さらに、〈C〉の文章であるが、ここでは〈B〉の「全体」と違って「部分」が強調されている。だがその意味は、あらゆる国々に労働者党内に入り込んだ、労働者党内の一部としての共産主義者を意味しているのであって、共産主義者自らが部分としての共産党をつくるという意味ではない。要するに、『宣言』に記された共産主義者とは、決して党ではなく、国際共産主義運動およびこれを担う種々の労働者党全体の利益を援護しこれを貫徹する諸個人のことであって、常に運動全体とかかわる人のことなのである。

### 3. 『宣言』に記された Partei の意味

最初に触れたように、『共産党宣言』のドイツ語文を読むと、共産党という表現は厳密には1箇所しか記されていないことに気づく。このことは、日本語訳の『共産党宣言』を読む

ただけではピンとこない。例えば、我が邦で最初に訳された幸徳秋水・堺利彦訳のものと、「共産党」だらけなのである。ためしに、前節で引用した部分を幸徳・堺共訳本から引いてみる。

「共産党 (Communist —— 訳者) は、平民全体との関係に於て、果して如何なる地位に立てりや。

共産党は、他の労働階級の諸党派に反対せる、別個の党派を組織するものにあらず。

彼等は平民全体の利害と分離し相異せる利害を有するものにあらず。

共産党が他の労働階級の諸党派と異なる所は唯だ是れのみ。曰く、諸国平民の一国的闘争に際して、共産党は総ての国粹以外に脱出して、平民全体共通の利害を指示し標榜する、其一なり」<sup>(4)</sup>。

読まれるごとく、日本に紹介された当時の『共産党宣言』は、文字通り共産党の宣言なのである。これでは、誰が読んでも日本においては、マルクス・エンゲルスは共産党の指導者であるかの錯覚に陥ってしまう。そのような党は、1848年当時ヨーロッパ中どこを探しても見つからなかったものである。

とはいえ、『共産党宣言』には、本文以外にもう1箇所、Kommunistische Partei と記された部分がある。それは表紙の綱領名（書名）である。1848年2月にロンドンで印刷されたといわれている『宣言』には、明白に「共産党」という文字が表紙に刻印されている。この事実からどんなことを物語ることができようか。1847年11月23日の時点で、エンゲルスはマルクスに対し以下の発言をしている。

「信条のことをもう少し考えてくれたまえ。ぼくは、問答形式をやめて、それを共産主義宣言という題にするのがいちばんだと思う。その中では多少とも歴史を述べなければならぬのだから、これまでの形式ではまったく不適當だ。ぼくは、自分で書いたこちらの（『共産主義の原理』 —— 石塚）を持っていく。それは平易に述べてはあるが、まずい編集で、大急ぎで書いたものだ。共産主義とは何か、から始め、それからすぐに、プロレタリアート —— 発生史、昔の労働者との相違、プロレタリアートとブルジョワジーとの対立の発展、恐慌、結論となる。その間に様ざまな付随的なことを述べ、最後に、公開するかぎりでの共産主義者の党政策（die Parteipolitik der Kommunisten）となる。こちらのものはまだ全部は承認を求めて提出してはないが、ぼくは、わずかばかりのごく些細な点を除いては、少なくともわれわれの見解に反するような点はその中に一つもないように、仕上げようと思っている」<sup>(5)</sup>。

エンゲルスは、義人同盟の組織上ならびに理論上の改編のために、『共産主義の原理』とい

う問答形式の綱領を書いた。そのことをマルクスに知らせているのが、この手紙である。この中でエンゲルスは、自分で起草しておきながら、問答形式の綱領はよくないと言っている。カテキズム（問答形式）は、カトリックやプロテスタントで用いられていた教理問答書と同一であり、またカルボナリなどの秘密結社の入会式における誓約と共通していた。そこでエンゲルスは、このカテキズムに代えて、マニフェストがいいとしたのである。その際「共産主義（者）の宣言」とはしても「共産党宣言」とはしていない。エンゲルスは、1847年11月段階において、新たに生まれ出ようとする共産主義者組織について、これを積極的に党（Partei）と表現してはいないのである。

しかしかれは、同じこの手紙の、『共産主義の原理』の内容を略述している箇所では、「共産主義の党政策」という表現を用いている。ここでは明確に共産主義者の党という表現を用いている。これはいったいどうしたことか。結論から述べると、ここでエンゲルスが党（Partei）という語を用いたのは、従来の義人同盟幹部たちの党観念および対外的な事情を考慮してのことである。一種のマヌーヴァーとして共産主義者党の表現を採ったのである。「公開すべきかぎりでの共産主義者の党政策」との文脈からすると、ここでエンゲルスが用いている党とは、トーリー・ウィッグ両党に始まるイギリス政党史上に位置づけられるものではなく、言葉の上では党と表現しているものの、実際のところは秘密結社ないし革命組織のことを意味しているのである。1840年代いっぱいを通してロンドンで義人同盟の秘密行動を行ってきたドイツ手工業職人たちは、議会制度発祥の国内に呼吸するからといって、政党政治には端から関心がない。エンゲルスは、秘密結社時代の義人同盟のことを今後は Bund と表現するほか Partei とも表現しようとしていたシャッパーら幹部の意向に、とりあえずつきあっているのである。また当のエンゲルス自身も、対外的にはブントでなくパルタイの方がよからうと考えていた。但し、名称の上だけのことである。1847年段階で、ブントのことをパルタイと表現すべきか否かは、マルクス・エンゲルスの構想する国際共産主義運動にとって、さしたる重要事ではなかった。それよりも、なんとでも強力な党を建設しようと同盟内外の職人活動家に呼びかけるシャッパー、モルら旧来の指導者との、必要以上の対立を回避する方を、エンゲルスは選んだのである。

ロンドン義人同盟の幹部たちは、1846年11月に、国際的な労働者大会を開催するため、ロンドンからヨーロッパ各地の同盟諸班へ回状を発したが<sup>(6)</sup>、このことに関してエンゲルスは、12月末、マルクスに手紙を送ってロンドンの同盟指導部を非難している。

「ロンドンの連中の件（11月回状発送の件—石塚）は、ちょうどあのハーニーのせいで腹立たしいことになっている。しかも、かれらは、渡り職人たち（Straubinger）の中では、

率直に下心なしに結びつきの試みができる唯一の相手だったのだから、それだけに腹立たしい。だが、あいつらがいやだと言うなら、それでもいい。勝手にしろだ！（中略）連中と決裂することは、われわれにとって少しも利益にならないし、名誉にもならない。理論的な争いはこの連中を相手にしてはほとんどありえない。というのは、かれらは何も理論をもっていないし、かれらの暗黙の疑念さえなければかれらはわれわれから教わろうと思っているからだ。かれらは自分たちの疑念を文章にまとめることもできない。（中略）実践的な党派争い（Praktische Parteidifferenzen）は——かれらは委員会では少数派だし、われわれも少数でしかないのだから——すぐにただの人身攻撃や喧嘩口論になってしまうだろう。またそのように見えるだろう。学識者（Literaten）に対しては、われわれは党（Partei）として行動できる。渡り職人に対してはできない」（7）。

エンゲルスは、1846-47年当時、党という語をやはりマヌーヴァーとして用いているのである。エンゲルスは、ロンドンの職人活動家たちはおよそ党としての活動を為していないと思っている。しかし、当のロンドン義人同盟幹部連は、自らの手で「強力な党（eine kräftige Partei）」<sup>(8)</sup>をつくるべく11月回状を発したのであった。そうであるなら、要らぬ口論は避けよう、綱領の最後のところにお印程度に Partei を使っておこう、対外的にも体裁が整う。エンゲルスはそう考えて『共産主義の原理』中で、例の「共産主義の党政策」という表現を1度だけ用いたのではあるまいか<sup>(9)</sup>。このように表現しておけば職人活動家も満足するし、外部の Literaten に対しては一応の窓口になる、というくらいに考えていたのだろう。それ以上積極的な意味を、マルクス・エンゲルスは Partei に対して認めていなかった。Bund はあくまでも協議と通信および行動の委員会として純化されればよいのであった。それゆえ、1848年2月刊行の同盟綱領文書の書名に Partei の文字が使われたとして、かれらにはさしたる不利益はなく、むしろマヌーヴァーとしての利益すらあったのである。書名は最終的に誰がどこで決めたか不明だが、その席上にマルクスがいて替意を表したか、自らこの書名を提案したかしてもおかしくはないのである。

そのような訳で、『宣言』本文においても、最終章のところで、『原理』同様ほんのお印程度に Partei を記したのであろう。die kommunistische Partei の一句が含まれている『宣言』第4章は、他の章と調子が違う。他章と比較して分量がきわめて少ないだけでなく、ここではとりわけ、現実の革命諸政党、諸団体との協力・妥協の原則が語られている。また、ここでは謂わゆる二段階革命の展望が示されている。さらには、この箇所は、第1章、第2章のような考究・分析の場でなく、ひときわボルテージの高いアジテーションになっている。まさに古参の秘密結社出身者、蜂起の杵柄を思い起こして血沸き肉おどる戦士たちに読ませた

い文章となっているのだ。

マルクス・エンゲルスが進める国際共産主義運動にとって必要な組織は統治にかかわるものでなく、革命にかかわるものである。それゆえ、トーリー・ウィッグ以来のイギリス議会政治を支える政党などは、二人の革命家には何の魅力もない。基礎となるものは、共産主義革命に至る諸運動を指導できるプロレタリアートの団結である。この団結は共産主義者の団結（共産党）でなく、プロレタリアートの団結（共産主義運動）であった。『共産党宣言』は、この国際共産主義の運動体のために書かれた綱領であって、政党としての共産党のために書かれたものではないのである。マルクス・エンゲルスが共産主義者の「党」を語るとき、それは政治（統治）の一部分（part）を受けもつような政党（party）ではありえないのである。

それはそうと、ロンドン義人同盟とマルクス・エンゲルスとの度重なる接触（特にエンゲルスの活躍による）の過程で、新綱領には「党」の文字が表題に付くことになる。その間の事情をいま少し詳しく述べるならば、以下のようである。

義人同盟再編のための国際労働者大会は、1847年6月と同年11月の2度開催され、第2回大会席上で、マルクス・エンゲルスは新綱領の起草を委任される。それと同時に、同じ第2回大会では、新たな組織にみあった新規約が採択された。シャッパー（議長）とエンゲルス（書記）の署名が付いているこの規約の第7章「大会」の第36条には、「党」の文字が記されている。「第36条、大会は各会期のうちに、その回状のほかに党の名のもとに(im Namen der Partei) 宣言(ein Manifest)を發布する」<sup>(10)</sup>。

旧ロンドン義人同盟の幹部たちは、マルクス・エンゲルスの理論的指導を受け容れて、新組織の名称を共産主義者同盟と改めたのだが、同時にかれらは、この組織を党ともみなした。よって、共産主義者同盟の大会が開かれたあとに発せられる声明をも、党の宣言と表現したのである。このような事情から、シャッパーら旧来の義人同盟幹部はマルクス・エンゲルスに対し、1847年11月の大会後、共産主義者同盟の新綱領を、規約に従って共産主義者の党宣言として起草するよう依頼したのであった。そして、これに応えるようにマルクス・エンゲルスは、『共産党宣言』のあの「ヨーロッパに幽霊が出る——共産主義という幽霊である」で始まるはしがきに、「共産主義の幽霊物語に党自身の宣言(ein Manifest der Partei selbst)」という一句を入れたのである<sup>(11)</sup>。それにもかかわらず、この新規約は、党の、でなく同盟の、である。規約第1章に「同盟」がきているものの、規約のどこを探しても「党」の章、条はない。この規約中にParteiという語は、上述の第7章第36条にわずか1箇所しか記されていないのである。

#### 4. 1848年革命後における Partei 問題

フランスのパリで二月革命が勃発し、これがドイツのウィーンとベルリンとで三月革命を誘発すると、マルクスらはドイツ革命の主体をブルジョワジーとプロレタリアートに据え、小ブルジョワジーを動揺・反動分子扱いにした。そしてプロレタリアートの任務は、独自の階級利益を掲げたり独自の行動をとったりするのではなく(それらは意識的に極力回避し)、あくまでもブルジョワジーに勝利をもたらすよう全力を尽くす、というものを想定していた。したがって、革命勃発の直前にロンドンで再組織された共産主義者同盟は、事実上解散状態となった。同盟員はみな個人に立ち戻って、民主主義者や進歩的ブルジョワジーの党に加わり、その一員として行動するよう促した。

だがドイツ革命の実際は、マルクスらが期待した進歩的ブルジョワジーを生み出さなかった。かれらの革命戦略は、現実によって敗北を余儀なくされたのであった。そこでマルクスは反省する。それから、1850年3月末に出された『共産主義者同盟中央委員会の同盟員への呼びかけ』という回状で、新たな革命戦略を提起する。

「ドイツの自由主義的ブルジョワが1848年に人民に対して演じた役割、このきわめて裏切りのな役割は、来たるべき革命では民主主義的小ブルジョワによって受け継がれるであろう。(中略)小ブルジョワ民主党に対する革命的労働者党の立場 (das Verhältnis der revolutionären Arbeiterpartei) はこうである。革命的労働者党は、それが打倒しようとする党派 (Fraktion) に対しては、民主党と共同してたたかう。だが民主党が己れ自身のために地歩を固めようとするようなあらゆる場合に、民主党に立ち向かう。(中略)われわれの利害と任務は、大なり小なりの有産階級が支配の座から排除され、国家権力をプロレタリアートの手中にし、プロレタリアの協同 (Assoziation) が一国のみならず全世界のあらゆる有力な国々においてきわめて広範に前進することで、このような国々にでのプロレタリアたちの競争が止み、せめて決定的な生産諸力がプロレタリアの手に集中するまで、革命を永續させることである。(中略)労働者、なかんずく同盟は、またぞろへりくだってブルジョワ民主主義者に拍手喝采をおくるコーラス隊を演じたりせずに、公式の民主党と並んで、労働者党の独自の組織を秘密裡にも公然とでも設立し、各々の班(同盟班——石塚)を労働者協会の中心・中核とするよう志して行動せねばならない。かれら(労働者——石塚)は、新たな公式の諸政府と並んで同時に独自の革命的労働者の諸政府を(中略)組織せねばならない。(中略)労働者は武装され組織されていなければならない。(中略)労働者は、自ら選出した指揮者と自ら選出した独自の参謀とをもつ、独自のプロレタリア

軍団(Grade)を組織して、国家権力でなく、労働者によって確立された革命的市町村議会の指揮下にはいるよう志さねばならない」<sup>(12)</sup>。

この「三月回状」には、不思議と、「共産主義」という語句が見あたらない。わずか1箇所だけ記されているが、それはあまり積極的でない——「労働者は、もちろん、運動の始めにはまだ直接に共産主義的な方策を提議することはできない」<sup>(13)</sup>。それに代えて「労働者党」「革命的労働者党」という表現が幾度も出てくる。また、この労働者党はとりわけ共産主義者同盟がつくりだすべき独自の組織とされている。よって、同盟と党とは別個のものである。共産主義者同盟は共産党ではない。同盟員はドイツ内外のあらゆる地方・都市で革命党としての労働者党を結成する任務を負う。そして、これら革命的労働者党はそれでまた、当面秘密組織として行動し、労働者が独自の政府を樹立するまで革命を永続させることを任務とする。さらには、労働者の独自の政府はそれでまた、労働者による革命的市町村議会に支えられながら、一国内の問題に対処するだけでなく、全世界にプロレタリアートのアソツィアツィオンを拡大することを使命とするのである。したがって、「三月回状」中に幾度 Partei が登場しても、それは、少なくとも革命的市町村議会か革命的労働者政府が樹立されれば権力をそれらに引渡して自らは解体する組織なのである。これらの党は、共産主義者同盟によって作り出されるものではあってもそれ自体ではありえず、したがってこの時点でも「共産党」は存在していない。

そうであるなら、共産主義者同盟の綱領として執筆された『共産党宣言』は、1850年段階においても依然として、共産党の宣言ということにはならないのである。

ところで、当の『共産党宣言』は、1850年代にはしだいに労働者や革命家たちのあいだで忘却のかなたに追いやられていく。革命が敗北して挫折をなめた人びとは、謂わゆる Forty-Eighters としてアメリカ合州国に移住したりした。その合州国では、かつてのマルクスの論敵ヴァイトリングが、自腹を切って刊行している週刊新聞『労働者共和国』中で、1851年秋、『共産党宣言』第1章と第2章を、ほぼそのまま——したがって著者名も記されず——ドイツ語で4回に分けて連載してはいたが<sup>(14)</sup>、コモン・マン(並の人)の時代からギルデッド・エイジ(金ぴか時代)への過渡期において階級的に流動化の激しいアメリカで、ヴァイトリング版『共産党宣言』は、合州国のドイツ人社会ですら殆ど読まれなかった。こうして、革命的労働者のいなくなったヨーロッパでも、かれらが亡命していったアメリカでも、『共産党宣言』は忘却のかなたに追いやられていったのである。

## 5. 第1 インタナショナルと Partei

1850年代を通じ、マルクスはロンドンで数々の著述を発表する。例えば、53年には『ケルンにおける共産主義者裁判の真相』（この著作の書名は日本では『ケルン共産党裁判の真相』とされ、共産党が裁かれたかの印象を与えているが、原題は Enthüllungen über den Kommunisten-Prozeß zu Köln で、1853年1月バーゼルで刊行された）を著わしてプロイセン国家を批判した。しかし、共産主義者同盟自体は、同年11月に解体している。『共産党宣言』を生み落とした組織はこに潰えた。次に54年～55年にはクリミア戦争の動向およびイギリス政府の対応について論評を発表し、さらに56年にはヨーロッパの経済恐慌について連続して論文を発表し、57年実際にヨーロッパが恐慌に襲われるや、いよいよ経済学研究に没頭していく。そうしてついに1859年、ベルリンにて『経済学批判』を刊行したのである。

こうした一連の著述活動は、とりあえずは人びとを『共産党宣言』に注目させる要因とはならなかったのだが、1863年1月、ポーランドで民族独立の民衆蜂起が勃発するや、マルクスはふたたび革命的労働者の国際的連帯の必要性を強く感じるようになる。好機到来といった機運の中で、マルクスは同年10月、「在ロンドン・ドイツ人労働者教育協会のポーランド人に関する檄」を起草した。そして翌64年9月、ロンドンで国際労働者協会、謂わゆる第1 インタナショナルの結成をみるに至った。この協会が結成される直接の契機は、1863年に始まった例のポーランド反乱に対して、イギリス・フランスの労働者が支援活動を行なったことだが、この協会の第一目的は、民族の解放というよりも、全世界の労働者の解放であった。マルクスは、10月『国際労働者協会創立宣言』および同協会の『暫定規約』を起草した。それと同時に、その頃ロンドンにやって来たバクーニンに『共産党宣言』を数部渡し、第1 インタナショナルへの協力を要請した。

これは何を意味するか。第1 インタナショナルと『共産党宣言』とは、どのような関係にあるというのか。なるほど第1 インタナショナルには、旧共産主義者同盟メンバーのシャッパー、プフェンダー、エッカリウス、F.レスナーらが参加している。しかし第1 インタナショナルはかつての共産同の再建という訳ではないのだから、旧来の組織の綱領がそのまま新組織の綱領として使える訳でなく、公式に承認された訳でもない。マルクスは、第1 インタナショナルと『共産党宣言』とを以下のように結びつけていたのではあるまいか。そもそも、『宣言』は一つの党のそれだけでなく、共産主義者が他の労働者党や労働者委員会などに介入していく際の、共産主義者以外の諸個人・諸団体に対する宣言であった。また『宣言』は、「イギリスのチャーティストとか北アメリカの農業改革者協会」に対する共産主義者の関係を述

べ、フランスやスイス、ポーランドでの共産主義者の立場を述べている。そして結びは「万国のプロレタリア、団結せよ！」で締括られている<sup>(15)</sup>。つまり、『宣言』はヨーロッパ各地の共産主義者がいろいろな革命運動・独立運動に関係する、そのあり方を明確にしたものであったし、共産同もまたしたがって、当初から国際的な組織連合体を目指していたのである。よって、1864年段階で国際労働者協会(International Workingmen's Association, 1864-76)は、謂わば第2次共産同のようにして登場してきたのであろう。したがって、ロンドンに滞在する諸国の革命指導者たちに対し、マルクスが『共産党宣言』を手渡しながら第1インタへの参加を訴えても、マルクス本人の側からすれば違和感はないのであった。第1インタは、かつての共産同とおなじく、けっして共産主義者だけからなる党ではないのである。

『宣言』を渡されてインタへの参加・協力を要請されたバクーニンは、マルクスからの誘いとは別個に、自らも国際的な労働者運動の強化のため、積極的にインタ内で活動していく。バクーニンは、1863年ポーランド蜂起の報に接するや、当時滞在中のロンドンからストックホルムへ向かい(2月)、同地にて結社活動を行ない、その後イタリアにてガリバルディに会い、ポーランド解放への協力を要請する。さらに翌64年、フィレンツェにて秘密結社「社会革命同盟」を企図し、フランス人にしてのちパリ・コンミュンの闘士となるエリゼ＝ルクリュなどにはこれに加盟した。フィレンツェを拠点にしつつもロンドンに戻ったバクーニンに、マルクスは『宣言』を手渡したという訳である。第1インタナショナルには、したがって共産主義者(マルクス派)ばかりでなく、アナキスト(バクーニン派)も強大な勢力として存在した。のみならず、63年2月『連合の原理』を刊行して3週間ほどで6,000部を売り尽くしたプルドン、かれを支持するグループも第1インタ内の有力な一派を為した。

そのように諸派の連合と妥協、反目が繰広げられている頃、ドイツのライプツィヒでラサールが、全ドイツ労働者協会を設立した(1863年、ラサール自身は翌64年恋愛事件で決闘となり死亡)。こうしてマルクスは、ドイツ国内でも、国際的な舞台でも、数多くの非共産主義的・反共産主義的な労働運動指導者やその一派と関係していくことになった。『資本論』第1巻をハンブルクで刊行した翌年の1868年、マルクスは「国際労働者協会とイギリス労働者組織との結合」を発表するなどして、諸派との協調や関係の明確化をはかっていく。だがほどなく、かれは諸派との協調よりも自らの思想的・理論的立脚点を第1インタ内外の革命諸派に公然と宣言すべき出来事にぶつかることとなった。その出来事とは、普仏戦争後にフランスの首都で勃発した労働者革命・パリ・コンミュンである<sup>(16)</sup>。

## 6. パリ・コンミュンと『宣言』第2版刊行

パリ・コンミュンは1871年3月18日から5月27日まで、ほんのわずかな日数しか存在しなかったのだが、この出来事がマルクスの革命理論強化に及ぼした影響は相当なものである。この事件に先立ち、マルクスは、諸派と自らとを次のように区別していた。すなわち、マルクスの考えでは、第1に共産主義はプロレタリアートの全面蜂起による世界（欧米）同時革命と、かれらによる政権樹立を通じて実現されるのでなければならなかった。また闘争の組み方にしても、経済闘争より政治闘争を重視し、前者は後者に転化して初めて意味をもつと考えた。さらに民族（自決）をも、中央集権的政治闘争とともに重視した。これに対し、例えばイギリスのトレード・ユニオンは労資協調型の経済闘争に偏りがちで、またラサール派はあまりにも政治闘争に傾きすぎる。あるいは、プルドン派はゼネ・ストばかり主張して、プロレタリアートへの権力集中を拒絶している。そもそもアナキストはおしなべて民族の問題を軽視している。そうかと思えば、民族を強調するからといって、共和主義者のマツィーニはインタナショナルイズムそのものを葬り去るほどの民族主義者だ、というようにマルクスは考えたのである。インタナショナルの内外でこのように諸派の争いが渦巻きだした頃、この動向をインタナショナルの分裂という事態にまで深める契機として、パリ・コンミュンが生じたのであった。

1869年のインタナショナル第4回大会（於バーゼル）の席上ですでに反マルクスの立場を表明していたバクーニンも、その後1871年春に生じたパリ・コンミュンについて、自らの立場を次のように表明した。

「わたしは、経済的および社会的平等の断乎たる支持者である。なぜならかかる平等をぬきにしては、自由、平等、人間の尊厳、道徳、それに諸個人の幸福、ならびに諸国民の繁栄が欺瞞と変らぬことを知っているからである。しかし、何はさておき人間の根本の条件である自由の支持者として、わたしは、この平等が、コンミュンの中で自由に組織され連合した生産組合の（*der produzierenden Assoziationen, die in den Gemeinden frei organisiert und förderiert*）集団的所有と労働の自発的組織化によって基礎づけられねばならず、またコンミュンの同様に自発的な連合によって（*durch die ganz ebenso spontane Föderation der Gemeinden*）であって、けっして国家の上からの後見的な行為によって（*durch die oberste und bevormundende Tätigkeit des Staates*）であってはならぬと考える」。

「わたしはパリ・コンミュンの支持者である。（中略）わたしは、特にコンミュンが大胆

な、きわめて顕著な、国家の否定であったからこそ、その支持者なのである」<sup>(17)</sup>。

ドイツ語版で引いたが、ネットラウによればこの文章「パリ・コンミュンと国家の概念」は、パンフレットとして各種のヨーロッパ語で出版されたというから、ドイツ語文で初めて読んだ同時代人も多いだろう。当のパリ・コンミュン参加者中ではブルードン派が多かったというから、文中の「連合（フェデラシオン）」はかれらにとって親しみのある語であったに違いない。ブルードン自身はすでに1866年に死去していたので、この出来事については何ら意見表明をできないのであるが、バクーニンはこのように明確な立場を表明した。要するに、パリ・コンミュンは労働者の自由な連合によって成立したアソシアシオンの自発的な連合の実現だったということである。バクーニンはここで、とうの昔に国家とか党とかを超えていた自己の思想的立脚点の、かれなりの正しさを再確認したのであった。

バクーニンのこうした態度表明に対し、マルクスはかれなりに独自に、パリ・コンミュンについて見解を表明した。

「労働者階級は、たんにできあいの国家（ready-made State）機関を掌握するだけでは、それらを自らの目的のために用いることはできない」。

「それ（パリ・コンミュン——石塚）は、本質的に労働者階級の政府（a working-class government）であった」<sup>(18)</sup>。

バクーニンが、パリ・コンミュンに初めて理想社会の雛型を発見したとすれば、マルクスもまたそれを発見したとしてよい。そのどちらが正しい認識だったかという議論は、ここでの直接の関心事ではない。それよりも、ここで、つまり『共産党宣言』における Partei の問題を考える上では、マルクスのかの言葉「労働者階級は、たんにできあいの国家機関を掌握するだけでは、それらを自らの目的のために用いることはできない」が重要となってくる。ここでは「できあいの国家機関」を“できあいの政党”と置き換えて欲しいのである。

パリ・コンミュンが生じる2年前、ドイツでベーベルとリープクネヒトにより、ドイツ社会民主主義労働者党、謂わゆるアイゼナハ派が創立された。これは歴としたマルクス主義政党である。ところで、この政党は“できあいの政党”であるか、それとも労働者が「自らの目的のために用いる」革命党であるか。答えは一応、後者ということになろう。そうであれば、この組織はけっして「ドイツ」とか「パルタイ」とかに限定されてはならないはずである。党（Partei）とは、語原からみるとラテン語の pars, partis に由来する。つまり全体の中の一部（Partie）と語原を一つにしている。これは、常に全体を求めてやまない共産主義者とは対立する。コムニスム（全体）はパルタイ（部分）を超越してこそ実現される。イギリスに始まる政党（party）は、国家権力の一部（part）を担ってきた。政党とは、18～19

世紀のイギリスで完成したブルジョワ支配秩序の一つなのである。これは、マルクスにすれば「できあい」のものでしかなく、党を、“労働者の”という形容を付けて再登場させたところで、それは依然としてこの党を支える個別の労働者、という“部分”を意味しているだけなのである。

パリ・コンミュンは、マルクスに根本的な影響を与えた。「コンミュンは代議体でなく、執行権であって同時に立法権を兼ねた、行動体」であった<sup>(19)</sup>。ここに“できあいの政党”の入り込む余地はまったくない。党（部分）ではなく、運動体としての共産主義者（全体）が入り込むべきなのだ。「たんに市政ばかりでなく、こんにちまで国家によって行使されてきた全イニシアティヴが、コンミュンの手中におかれた」<sup>(20)</sup>。これを実現したパリの労働者は、もはやかつての秘密結社の指導者や、そのもとにあって蜂起の合図と首都制圧のXデーを待ち望んでいる結社員とは訳が違う。1847年11月の時点でマルクス・エンゲルスが参加した義人同盟には、未だ旧来のカルボナリ出身者が散見された。そのような職人活動家たちに依頼されて起草した『共産党宣言』には、どこかに結社の名残りをもたせなければならなかった。それでいて他方では、ブントでなくイギリス流のパーティという語を使いたがる同盟員との協調・妥協をはかるための努力も必要とした。かの革命の時代から20数年経て、ついにパリの労働者達は、いっさいの陰謀から解放され、党の指導とも無関係に、自らの行動体であるコンミュンを実現したのであった。ここに至ってマルクスは、もはや“部分”としての Partei によって“全体”としての Paris Commune を説明することはしなかったのである。コンミュンについて論評した『国際労働者協会総務委員会の宣言』謂わゆる『フランスの内乱』には、一度たりとも“共産党”のことは語られない。登場するのは常に、全体を実現しつつあるコンミュンだけなのだ。

パリ・コンミュンの翌年、マルクス・エンゲルスは『共産党宣言』第2版を刊行する。この新版刊行の作業は、そうのんびりとはやっていたらなかった。というのも、二人は、1871年中にインタナショナル・ロンドン大会（9月）のために『総務委員会への提案』、『暫定的決議案』を起草したり（9月）、翌72年1月には、エンゲルスが「ソンヴィエ大会のインタナショナル」を起草してバクーニン派を批判し、またマルクスはインタナショナル・ハーグ大会（9月）にて、バクーニン除名のための報告を行ない、あわせてインタナショナル本部のニューヨーク移転を決議したりして、行動のさなかにいたからである。特に、インタナショナル本部の移転は、事実上のインタナショナル崩壊を意味するものであった。このように多事多難な折に、マルクスとエンゲルスは急いで『宣言』第2版を刊行するのである。

1872年版の『宣言』をみると、表題にちょっとした変更の加えられていることに気づく。

初版の Manifest der Kommunistischen Partei が、今回は Das Kommunistische Manifest と改められている。Partei の一語が削除された。そのことにつき、例えば1945年にディーツ社で刊行されたドイツ語版『宣言』の編者は、1872年以来そのように簡略して呼ばれたとしているだけで<sup>(21)</sup>、なぜ簡略化されたかについての説明は加えていない。わたしにすれば、1872年に、マルクスとエンゲルスは、大いなる意味をもってこの書名変更を行なったのである。Partei は、略してよいほど軽いものでなく、略さねばならぬほど由々しきものなのである。

思いかえせば、1847～48年段階で、共産党はむろんのこと、マルクス・エンゲルスの周囲に革命党としての労働者党は存在していなかった。そのような時期にかれらは、あえて“共産党の宣言”を発したのである。そして、1872年段階で、アイゼナハ派にせよラサール派にせよ、マルクス・エンゲルスの周囲（というよりもドイツ本国）には、革命党を自認する労働者党が存在していた。そのような時期にかれらは、“共産党の”ではなく、あえて“共産主義者の宣言”を発したのである。これは実に奇妙なことだ。周囲に、自己と見間違えられる党が存在しないなら、ことさら自分の党の特徴を他に訴えるに及ばない。逆に、周囲に自己と似たような党が複数存在しているのなら、「わが党は」と、むしろ訴えるべきところである。しかしマルクス・エンゲルスは正反対のことをした。

いま一步踏み込んで考えれば、上述の事情は少しも不思議なことではなくなる。マルクス・エンゲルスの意味における共産主義は、将来の労働者アソツィアツィオン実現へと向かう運動であり、行動体（コンミュン）なのだから、自らを党（部分）として分立させることはありえない。共産主義者は、欧米のあらゆる都市・農村で地区コンミュンを設立すべく行動する労働者党の中に存在するのである。そのことは、ドイツ社会民主主義労働者党にも妥当する。この党は共産党ではない。共産党という組織は、共産主義運動にはけっして存在しない。万国のプロレタリアートの間にあった他の労働者党のむこうを張って自己の党を結成しないのが、共産主義なのだ。革命はプロレタリアートの仕事であり、その目標はアソツィアツィオンの実現である。しかし、これは一挙に為し遂げることができない。それに先立って、プロレタリアートは自己の権力実体として労働者政府を樹立する。さらに、その政府を樹立するまでは各地区・各都市に労働者の党を組織して、革命運動を推進する。ところで、共産主義者は、その労働者党の一員となって運動を前進させるが、革命を実行した段階—— 実例としてはパリ・コンミュン—— においては、党はもはや問題にならない。ここでは行動体としてのコンミュン—— マルクスにおける労働者政府—— は、むろん共産主義者がその指導的中核を形成するものの、かれらはけっして党を結成している訳ではない。よって、プロレタリアート革命において党が積極的な意味をもつのは、労働者の政府が樹立されるまで、とい

うことになる。それにしても、ここで述べている党とは、共産党のことではないのである。かように、マルクス・エンゲルスにとって共産党という組織は、文字通りの幽霊である。共産党が指導するプロレタリアート革命などという構えを19世紀のヨーロッパ社会に想定してみても、それはまぼろしである。マルクス・エンゲルスが1872年において『宣言』表題からParteiを削ったのは、必然のなりゆきだったのである。共産主義者マルクス・エンゲルスは、端から、党を超えていたのだ。

## 7. 共産党が指導するプロレタリアート革命

マルクス・エンゲルスが共産主義者として党を超えることができた根拠は、一つにはイギリスやフランスの工場労働者が、自覚して共産主義運動を展開していたことである<sup>(22)</sup>。パリ・コムンでは、そこに参加した労働者たちの階級的自覚がコムン成立にとってきわめて重要な役割を果たした。だが、住民の圧倒的多数が農民や遊牧民であるような諸国、例えばロシアに目を向ければ、共産主義者が党を超えるということは、はなはだ困難となる。ここでは、党の役割は、マルクス・エンゲルスが考えていた以上のものとならざるをえない。端的に述べれば、ロシアでは、まず以て共産主義者がかれらだけから成る党を結成し、しかるのちロシアにプロレタリアートを創出せねばならないのである。事の順序が逆なのである。ここでは、あからさまに共産主義者の党、共産党の結成が、まずすべての出発点となる。そして共産党の任務は、なんともグロテスクな話だが、たんなる労働者——即自的プロレタリア——に外部から革命的・階級的意識を注ぎ込んでプロレタリアート革命の主体へと育てあげることとなるのである。ロシア革命の指導者レーニンは述べている。

「もっともたしかに、経験にとみ、鍛練された労働者たちからなる、緊密に結束した小さい中核があって、主要な諸地区に委任代表をもち、もっとも厳格な秘密活動のあらゆる規則にしたがって革命家の組織と結びついているなら、それは、大衆のもっとも広範な協力をうけて、どんなきまった形もなしに、職業的組織に課せられるいっさいの機能をはたし、そのうえまさに社会民主主義にとってのぞましいやりかたではたすことが完全にできるであろう」<sup>(23)</sup>

「確固たる、継承性をもった指導者の組織がないなら、どんな革命運動も恒久的とはなり得ない」<sup>(24)</sup>

「もっとも秘密な機能を革命家の組織に集中することによって、広範な公衆を目あてとした、したがってできるだけきまった形をもたず、できるだけ秘密でない他の多くの組織——

—労働者の職業組合も、労働者の独習や非合法文書の読書のためのサークルも、他のいっさいの住民層のなかの社会主義的ならびに民主主義的サークルも、そのほかいろいろのもの——の活動の広さと内容の潤沢さは、よわめられず、かえって豊富になるであろう」<sup>(25)</sup>

以上は『なにをなすべきか』からの重厚長大なる引用である。レーニンは、プロレタリアートの自然発生的たたかいは、強固な革命家の秘密組織に指導されないかぎり、階級闘争にまで高まることはない、とする。ここで指摘される革命家の組織とは、第一に職業革命家で構成される党である。その下には厳格に結束した、経験と鍛練とに富む中核集団と、勤労大衆の同情と支持とにとりかこまれた、広範な地方党組織がある。そして、さらにその下に一般大衆がいる。レーニンにおける党は、もはやマルクス・エンゲルスにおける党とは、次元をまったく異にしている。レーニンにおいて、党を構成するのは職業として革命運動を遂行する共産主義者である。またレーニンにおいて、プロレタリアートとは訓練された中核集団、謂わゆる労働者革命家と、先進的大衆つまり目的意識性をもったプロレタリアである。そして大衆とは、即自的プロレタリア、現象的には賃金労働者一般である。党は、中核集団を介し、各地区・各都市で個別闘争を組むが、その直接目的はロマノフ朝打倒でなく、闘争を通じて大量の共産主義者ないし目的意識性をもったプロレタリアートを産出することである。闘争の過程で大量の共産主義者を産出することは、とりもなおさず闘う実体としての労働者権力を社会の内部に産出し、これを拡大強化していくことになる。こうして、レーニンの党は、革命運動の最高指導部——その意味では唯一の指令部——となるのであった。

この構えは、マルクスが起草した第1インタナショナル一般規約の第7条aとも微妙に食い違うものである。マルクスいわく、

「プロレタリアートは、有産階級によってつくられたすべての古い政党に対立する別個の政党に自分を組織することによってのみ、階級として行動することができる。

このようにプロレタリアートを一つの政党に組織することは、社会革命とその終局目標たる階級の廃止との勝利を確保するのに不可欠である」<sup>(26)</sup>

この引用文には、のちにレーニンによって明確に定式化される〈党と大衆〉の区別は読み込めない。また、ここで語られている「一つの政党」は、やはり共産党ではなく、その先頭に立って共産主義者が組織形成に尽くすような、労働者党なのである。こちらは、あくまでも全体の中の一部を構成しているにすぎない。マルクスの『ゴータ綱領批判』(1875)はまさにそこを突いている。ラサール派は、自らが部分(Partei)であることに何の疑問を抱かない。そこをマルクスは徹底的に批判しているのだ。かれの言いたいことは、1871年パリでのよう

に、コンミュンが樹立されれば権力実体としての個々の労働者党はおのずと解消し、すべての権力はコンミュンに——マルクスにおいては労働者政府に——集中する、ということなのだ。

ところで、ロシア革命が軍事力学上の勝利を収めて成功したとき、レーニンが、労働者ソヴェトと党（ボリシェヴィキ）との関係をどのように捉えていたであろうか。知られている標語によれば“すべての権力をソヴェトへ！”ということであるから、党つまりボリシェヴィキはソヴェトに従属することになるはずであった。レーニンは、1917年の2度の革命にはさまれた時期に『国家と革命』を起草し、その中であらかじめ次のようにモデルを示していた。

「労働者は、政権をたたかいとったのち、旧官僚機構を粉碎し、それを徹底的に打ち砕いて、一物ものこさないようにし、これを同じ労働者と勤務員からなる新しい機構ととりかえる。そして彼らが官僚へ転化するのを防ぐために、マルクスとエンゲルスの詳しく考究した方策が即座にとられるであろう。すなわち、(一) 選挙制だけでなく、随時の解任制、(二) 労働者なみの賃金をこえない俸給、(三) すべての者がある期間『官僚』になり、したがってだれも『官僚』になれない状態へただちに移行すること」<sup>(27)</sup>。

ここに記されたマルクス・エンゲルスの方策とは、もともとはパリ・コンミュンの闘士が実践したものである。レーニンはマルクスらと同様、パリ・コンミュンを高く評価する。そのかぎりではかれはコンミュンについての観念をマルクス・エンゲルスと共有している。だが、このコンミュンを樹立するまでの共産主義者の役割となると、まったく別途の方策を考案したのだった。秘密裡に、十分な訓練を受けた少数の職業革命家たちは、そうであるからなおのこと、ロシア革命の成功に最大の貢献を為したのである。

その精鋭部隊が、革命勝利と同時に、とあるソヴェトのとある構成員の位置に甘んじるであろうか。そこまでいかないと、党の権力をすべてソヴェトに譲渡するであろうか。また、仮りにそうしたとして、突如職業革命家の集団を解体して、新生ロシアは労働者政府を維持できるか。ロシア革命を成功させるのに功労のあった職革・労革の指導者集団は、けっきょく、ソヴェトにおいて「だれも『官僚』になれない状態」を選択するのではなく、党を残存させて、永久に独裁権を保持できる状態を選択したのである。ロシア革命は、軍事上の勝利は収めたものの、共産主義革命としてはレーニンの死を以て内的に敗北したのであった。レーニンのあとを継いだスターリンには、国際共産主義運動史上記念碑的存在となって久しいマルクス・エンゲルスの『共産党宣言』は、是非とも“党の宣言”であらねばならなかった。ロシア革命と全世界の共産主義運動をその先頭で指導しているのは、スターリン率いるソヴ

エト共産党であるのだから<sup>(28)</sup>

## 8. 今後に生きる『共産党宣言』

ときは、ロシア革命から75年以上経過した。共産主義運動の前進という点では1924年に潰え去っていたソヴェト社会主義共和国連邦は、先般、完全に内部崩壊し、やがて到達するであろう今一度の突破口をめざして、とりあえずはエリツインのロシアとなって市場経済の荒波に浮き沈みして漂っている。この浮き沈みに身をまかせて、あの『共産党宣言』の命運も尽きてしまったのだろうか。わたしには、そうは思えない。なるほど“党の宣言”であると誤解されてしまった方の『共産党宣言』はソヴェト共産党とともに博物館入りしたのであるが、アソツィアツィオン建設の宣言としての『共産党宣言』は、今後その理論的輝きをいっそう増して、人びとの将来を明るく照らし出すことだろう。そのためにはしかし、支配の道具としての、いや支配権力それ自体としての政党が廃絶されることが第一の前提条件となるのである。党はコンミュンを、ソヴェトを殺してしまうのである。

幸いなことに、第一の前提条件は、まず以て旧ソ連・東欧で、人民の力によって達成された。こうして一歩めは踏み出されたのである。

### 註

- (1) Harold J. Laski, *Communist Manifesto, Socialist Landmark*, London 1961, p.75. 山村喬訳、『共産党宣言小史』法政大学出版局, 1967年, 98頁。
- (2) K. Marx/F. Engels, *Manifest der Kommunistischen Partei*, Berlin (Ost) 1969, S.82. 大内兵衛・向坂逸郎共訳、『共産党宣言』岩波文庫, 1969 (初刷1951) 年, 86頁。
- (3) *Manifest.*, S.57f. 邦訳, 57頁。
- (4) 幸徳秋水・堺利彦共訳、『共産党宣言』, 羅府日本人労働協会発行, 1926年, 41頁。この翻訳は、まず『平民新聞』創刊1周年記念として、同紙第53号に掲載されたが、即刻秩序壊乱との理由で取締りの対象とされた。このときは本文の第1章と第2章のみだった。その後堺は、1906年『社会主義研究』第1号に、第3章を加えたものを掲載した。底本は1888年のイギリス語訳版である。なお、この羅府日本人労働協会の単行本は、共訳者に無断で印刷したものであると、同書巻末に記されている。
- (5) *Neue MEGA*, III/2, Briefe Mai 1846 bis Dezember 1848, S.122. 邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第27巻, 大月書店, 1974 (初刷1971) 年, 100—101頁。

- (6) 1840年代中頃からの義人同盟およびロンドンでの国際共産主義者大会に関する詳細な分析については、拙著『三月前期の急進主義——青年ヘーゲル派と義人同盟に関する社会思想史的研究』長崎出版、1983年、237頁以下参照。
- (7) *Neue MEGA*, III/2, S.67. 『全集』第27巻, 67—68頁。
- (8) Ansprache der Volkshalle des Bundes der Gerechten an den Bund, November 1846, in *Der Bund der Kommunisten. Dokumente und Materialien*, Bd.1 1836-1849. (hg.v. Institut für Marxismus-Lenismus beim ZK der SED und beim ZK der KPdSU, Berlin (Ost) 1970, S.431.
- (9) F.Engels, *Grundsätze des Kommunismus*, Berlin (Ost) 1970, S.34. 『全集』第4巻, 1971(初刷1960)年, 396頁。
- (10) Statuten des Bundes der Kommunisten, angenommen vom zweiten Kongress, in *Der Bund der Kommunisten.*, Bd.1, S.629. 『全集』第4巻, 616頁。なお、1848年1月25日付の、共産主義者同盟中央委員会(ロンドン)からブリュッセル地区委員会(マルクスら)にあてた通信「1月24日の中央委員会決議」には、マルクスに対し新綱領を2月1日までにロンドンへ送るよう催促しているが、そこには綱領名として“Manifest der K.Partei”と記されている。*Ibid.*, S.654.
- (11) K.Mar, X/F. Engels, *Manifest.*, S.41. 『全集』, 37頁。
- (12) Ansprache der Zentralbehörde des Bundes der Kommunisten vom März 1850, in *Der Bund der Kommunisten.*, Bd.2, 1982, SS.136-142. 『全集』第7巻, 1971(初刷1961)年, 250-255頁。
- (13) *Ibid.*, S.145. 『全集』第7巻, 258頁。
- (14) 拙著、『社会思想の脱・構築——ヴァイトリング研究』世界書院、1991年、付録II「ヴァイトリング編集『労働者共和国』(ニューヨーク、1850-1855)主要記事目録」、189頁以下参照。
- (15) *Manifest.*, S.81f., S.83. 『宣言』, 85頁, 87頁。
- (16) 19世紀後半のヨーロッパ社会主義運動史・国際労働運動史にかかわる叙述は、拙著『年表・三月革命人——急進派の思想と行動』秀文社(発売元・社会思想史の窓刊行会)、1983年、を参考にしている。
- (17) M.Bakunin, Die Commune von Paris und der Staatsbegriff, in *Michael Bakunin Gesamte Werke*, Bd.2, Berlin 1921 (Nachdruck, Berlin 1975), S.269f. 外川継男訳「パリ・コミューンと国家の概念」, 『バクーニン著作集』第3巻, 白水社, 1973年, 147-149頁。
- (18) K.Marx, *The Civil War in France*, London 1921, p.28, p.33. 木下半治訳, 『フランス

の内乱』岩波文庫，90頁，101頁。

(19)・(20) *Ibid.*，p.30， p.31. 邦訳，95頁。

(21) *Manifest.*，S.5. 同頁には以下のように記されている。“Das ‘Manifest der Kommunistischen Partei’， seit 1872 auch kurz ‘Das Kommunistische Manifest’ genannt， war schon 1890 ‘das weitest verbreitete， das internationalste Product der gesamten sozialistischen Literatur’ (Engels).”

(22) フランスにおけるプロレタリアートの自覚的な運動を記した文献に以下のものがある。ローレンツ＝シュタイン（石川三義・石塚正英・柴田隆行共訳），『平等原理と社会主義——今日のフランスにおける社会主義と共産主義』法政大学出版局，1990年。特に，426頁以下の第4部。

(23)～(25) レーニン（全集刊行委員会訳），『なにをなすべきか』大月書店（国民文庫），181頁，189頁，191頁。

(26) マルクス（マルクス・エンゲルス選集刊行委員会訳），「国際労働者協会一般規約」，『ゴータ綱領批判・エルフルト綱領批判』大月書店（国民文庫），28頁。

(27) レーニン（全集刊行委員会訳），『国家と革命』大月書店（国民文庫），139頁。

(28) レーニンおよびスターリンにおける党の問題については拙著『文化による抵抗——アミルカル＝カブラルの思想』柘植書房，1992年，第6章「プロレタリアート革命と政党の廃絶」参照。

## <編集後記>

本号の筆者石塚正英氏は、本学では非常勤講師として社会思想史の講義を担当されている。氏には当研究所のグループ研究「現代社会の学問的課題」の研究会（1993年1月14日）で報告をしていただいたが、その際何人かの出席者から、興味深い内容なので活字にさせていただいてはどうか、との要望が出された。幸いにして快諾をえることができ、執筆をしていただいたのが本稿である。当日は、的場明弘氏（神奈川大学・本学非常勤講師）および村上俊介氏（当研究所所員）も報告された。的場氏は当日の報告内容をさらに補充する史料を求めて直後に渡欧されたため原稿をいただけなかったのは残念である。

『共産党宣言』という遍く知られたはずの小冊子にさえ、誰が・何のために・どの様にして・書いたのかに関して、改めて検討すべき課題が残されていることを当日の報告から知った。学問研究は同時代の課題に機敏に対応することも必要かもしれないが、それ以上にそれはより長い射程で歴史や社会を捉えるところにこそ存在理由かあろう。150年前の時代状況が生み出した『宣言』を読み解くことは、好事家の知的好奇心を満たすだけの作業ではないのである。

「強度の累進課税」や「単一国立銀行による信用のコントロール」、 「公共無料教育」など、『宣言』に揚げられた革命政権の政策のいくつかは、現代資本主義が実現してしまった。逆説的ではあるがそこにソ連型社会主義の崩壊の根底的な原因があったのかもしれない。『宣言』から、そのような部分をそぎおとして、なおそこに残るものはなにか。本稿で示唆されている「アソシアシオン」もその一つであろうか。

< R・I >

---

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 麻島昭一

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561

---